

支部長からのメッセージ

－これからの社会、経済、働き方の方向性について－

I G S 日本支部支部長 三木 博史

はじめに

2017年1月から2年間、意に反して10年の節目を超えて支部長を継続することになりました。ちょうど「動乱の時代」の幕開けと重なりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

世の中はこれから大きく転換し、世界中で「すみわけ」を目指して、「持続可能な地域循環社会」の「立て直し」が始まります。世界のなかで果たすべき日本や日本人の役割も、これまで以上に大きくなります。そうした息吹を今回のメッセージから感じ取っていただければ幸いです。

1. これまでの「支部長からのメッセージ」の要旨－日本型共同体の再生を－

これまで支部長として、「地域再生のための処方箋」と題し、ジオシンセティック技術情報2010年3月号と2011年7月号に連載を発表してきました。これらを通じて、いま地球規模のパラダイムシフトが進行中で、こうした激動の時代においては、個人も企業も地域社会も国家も、裸一貫の生活力を取り戻し、みんなが草の根のようにつながって、自然や周りの人々と共生する知恵を出しながら、持続可能な地域自給圏や地場産業の再生を目指してたくましく生き延びていくことが不可欠であること、そして、そのヒントをいくつかの文献をもとに紹介してきました。

その続報となる2014年7月号の「支部長からのメッセージ」では、『再起日本！－世界のハイテク技術を拓く』（前川正雄著）¹⁾を紹介し、日本の強みと世界のなかでの日本の役割に関する以下のようなヒントをお伝えしました。

1) それぞれの国が無益な競争を止め「すみわけ」をしないと生き続けられないこと、生物の世界の進化とは「すみわけ」の密度が高くなることである。21世紀は、資本もあるし、役員、従業員もいて、市場もあるが、それらがすべて「共同体」になっている「場所主義」が主流になる。

2) 日本の強みは、日本型共同体を支える「寄り合い文化」にある。日本の村落共同体における「寄り合い」では、全員が徹底的に話し合い、全員にとって満足のいく結論が出てくる。もっと大切なのは、結論が出る過程で「共同体の質」が深まることである。

3) すべてを受け入れ溶かし込む「まれびと文化」も日本の強みの一つである。最近、日本発の「まれびと」が世界に向かい始めた。日本食ブーム、漫画、アニメ、ゲーム、日本的生産方式、最近の日本の都市、ハイテク産業集積地区などは、これから次から次へと海外に渡っていくのではないかと。

4) コトを発見してモノづくりをするのも日本の特長である。日本人は、現象の奥に意味や本質を感じとる、世界にない繊細な感性を備えている。日本のモノづくりにもこの感性が活きてい

る。21 世紀のハイテク産業における技術は、何人かの匠で構成される共同体から生まれてくる。そこでは、文化と技能、そして、技術が一体化している。これこそ、21 世紀の「発酵型ハイテク産業地帯」というべきだろう。

5) 会社の目的は「生き続ける」ことであり、その手段として利益がある。しかし、利益が目的になってしまうと、生き続けることが二の次になってしまう。それでは逆なのだ。製造業は 50 年、100 年かけてできあがる、場所性を強く持った産業であり、50 年、100 年かけて人をつくるところから始めないと本物にはならない。

6) これからは日本の製造業を中心に世界が回る。日本の製造業に続く二番手、三番手がないのだ。「共同体の質」とは、どれだけ速く、どこまで深く、全体の合意が得られるか、である。深い合意ができる共同体は一を聞いて十を知る。すぐ実行に移れる。結果は見事で、一糸の乱れもない。そうした企業文化が大事である。「日本型共同体」の再興を！

同じく、2014 年 7 月号の「支部長からのメッセージ」では、もう一つ、『日本の米—環境と文化はかく作られた』（富山和子著）²⁾から、次のようなヒントを紹介しました。

1) 日本民族の「いのちの根」である稲は、稲が必要とする水の技術とともにやって来た。水をめぐる緊張関係によって共同体が生まれ、緊張関係によって共同体の秩序も維持される社会。洪水や渇水など、厳しい自然との緊張関係に加え、上流対下流、右岸対左岸、村対村、田んぼ対田んぼ、といった人間社会内部の緊張関係が無限に続く社会。それは、「水をコントロールする文化」にほかならなかった。

2) 森林は、実は米が作ってきた。高度に発達した文明国のなかで、日本人は木を伐っては植え、植えついで、緑を絶やさなかったほとんど唯一の民族である。漆や砂防（サポー）は、世界共通の国際語になっている。稲を育てる水、まさにその水ゆえにこそ森林は神聖であった。

3) 全国に張り巡らされた石垣水田や棚田は、日本の文化と環境を守り、森林を含む国土の安定を支える根幹であり、これを担う土木技術者や農業者の役割は極めて大きい。

2. 前回の「支部長からのメッセージ」の要旨—健康法についての最新の知見—

2015 年 11 月号の「支部長からのメッセージ」では、「ロハス」（健康と持続可能性を考えたライフスタイル）を実現するための両輪の一つである「健康」に焦点をあて、最新の知見を紹介しました。日本では、すでに 65 歳以上の高齢者の割合が 26%を超えており、国民全体の年間の医療費が 40 兆円（うち癌関連が 15 兆円）に達するそうです。少子高齢化が今後ますます進むなかで、日本が活力を失わないためにも、あらためて「健康」について見直すことは国家的・国民的な大テーマと言えます。その要点は、以下のとおりです。

2-1 身近にできる放射性物質への対処法³⁾より

放射性物質による内部被曝の軽減にも、生体ミネラルが重要な働きをします。セシウムは、必須ミネラルであるカリウムと同族元素で、性質がよく似ています。これが体内に入った場合、胃腸から吸収され、全身（特に筋肉）に均一に分布します。体内のカリウムが不足していると、セシウムが体内に入った時に、カリウムと同じ経路をたどり、体内に取り込まれてしまいます。

ストロンチウムは、必須ミネラルであるカルシウムと同族元素で、性質がよく似ています。体内のカルシウムが不足していると、ストロンチウムが体内に入った時に、カルシウムと同様に

骨に集まり蓄積しやすく、体内に取り込まれてしまいます。

これらの放射性物質を体内で吸収しにくくするには、ミネラル不足にならないことが大切です。不要な物質を尿や便に混じって体外に排出させるような作用は、常に体内環境を一定に保とうとして体内で働いています。このような機能のことを、ホメオスタシス（生体恒常性）といいます。

2-2 重曹と海塩の効果 (<http://blog.sq-life.jp/toni/log/message/005151.shtml> より)

自然な方法で放射能による悪影響から身体を守りたい人に、以下のアドバイスをお届けします。

●放射線治療を受けている場合： マクロビオティックをお奨めします。

●ガンと診断されて、放射線治療を全面的に避けたいと考えている場合： クシ・アベリンとクシ・ミチオ両氏による著書『マクロビオティック・ダイエット』によると、「1945年の長崎原爆による攻撃の時、秋月辰一郎医師は、長崎の聖フランシス病院の内科医師でした。爆撃現場から約1.6km地点であるこの病院の入院患者のほとんどが、原爆による初期の影響を生き抜くことができましたが、その後すぐに、放出された放射性物質による放射性疾患の症状を見せ始めました。秋月医師は、病院スタッフと患者に、徹底的なマクロビオティックの食事指導を行いました。それは玄米、味噌とたまり醤油のスープ、わかめやその他の海藻類、北海道のかぼちゃ、海塩という内容で、砂糖と甘いものを禁止しました。その結果、病院の全員が無事でした。その一方で、同市の市民の多くが、放射性疾患によって命を落としていきました。」

●海塩について： あらゆる放射線被ばくを生き抜く秘訣は、海塩にあります。あなたがもし、日本の原発事故による災害に直面しているか、X線を受けた（病院や空港の検査）、あるいはガンの放射線治療を受けた場合、海塩（ヨウ化した食卓塩ではないもの）入りのお風呂に入り、体内に入った放射性物質を出しましょう。または、西インド諸島か南太平洋諸島の海か死海で3週間ほど泳ぐのも良いですよ！なぜ西インド諸島か南太平洋かというと、塩が高濃度だからです。海塩は放射能を体内から引っ張り出してくれるのです。あるいは、質の良い海塩を一つまみ、蒸留水に入れて、毎日コップ数杯を飲みます。これで、体内の放射性物質を除去するのに必要なミネラルと痕跡元素を補給できます。

●重曹について： 口腔ガンや咽喉ガンと診断されて、危険な放射線治療を受けなければいけない場合、重曹を水に混ぜてうがいをすることで、放射線を中和することが可能です。アメリカ合衆国陸軍は、腎臓への放射線障害防止に重曹を推奨しています。放射性毒を体内から排出するためには、お風呂のお湯に海塩と重曹を1/2カップずつ入れてください。毎日20～30分間を約3週間、または、2日に1度、6週間、そのお湯に浸かります。（三木注：温泉でも重曹泉、塩泉、その混合泉はたくさんあり、飲泉できるところもあります。）

2-3 病気にならない常識を身に着けよう—最新の知見^{4),5)}から

私たちの身体は約60兆個の細胞から成っており、その個々の細胞のなかに数百から数千のミトコンドリアが棲みつき、生命エネルギーを生み出しています。そして、このミトコンドリアの働きを活性化することが健康長寿につながります。

私たち生命体は、12億年前、「無酸素で生きる解糖系生命体」と「有酸素で生きるミトコンドリア系生命体」が合体して、現在の真核生物として再出発した：「解糖系」は、酸素を使わずに糖を分解してエネルギーをつくり、「ミトコンドリア系」は、酸素を使って解糖系が分解した栄養素から、より多くのエネルギーをつくる。真核細胞は、ミトコンドリアと共生することにより、

激しく分裂する性質を持たなくなったのです。

そうした生命体の再出発のおかげで私たち真核生物は、2つのメカニズムでエネルギーを生成することにより生命を維持しています。つまり、50%は無酸素で、50%は有酸素でエネルギーをつくり出します。(ミトコンドリアは、細胞分裂の穏やかな筋肉の細胞や脳神経の細胞では多く、細胞分裂の激しい皮膚や骨髄そして精子の細胞では少ない。)

過酷な生き方をすると、交感神経が緊張して、血管が収縮して血流が悪くなり、身体が低体温や低酸素の状態になる：交感神経緊張状態によって血流障害が起こると細胞は酸欠状態に陥ります。すると、細胞内で酸素を使ってエネルギーをつくっているミトコンドリアの機能が抑制されてしまうのです。逆に好条件は、有酸素であることと、37度以上の暖かい世界であることです。すごく偏った食事をしていても、37度以上の体温が維持されている人であれば健康を維持できます。

発がんに影響する自律神経の働き/ がんを育てるのは低体温・低酸素：瞬発力を出すために働く解糖系にとっては、低体温・低酸素の状態と高血糖があればいいのです。「がまんする」とか、「もっとがんばる」とか、無理や過酷な生き方が交感神経の緊張状態を生み、その結果、低体温・低酸素の状態が続くのです。ふだんから身体を温めて低体温を避け、深呼吸をしてミトコンドリアに有利な生き方を続けることです。がんというのは、過酷な環境下でミトコンドリアが生きづらくなったときに、本体細胞が先祖返りを起こして分裂し始めた現象です。

野菜食はミトコンドリアの元気の源：がん細胞は「解糖系」で生きているので、糖を使っています。一方、ミトコンドリアは、カリウム（カリウム40という放射性同位元素）を使っています。カリウム40は、微量な放射線を出しながら崩壊する性質を持っており、ミトコンドリアが発電する際には、栄養素から取り出した水素原子を電子と陽子に分けて使う必要があるのですが、それを解離させることができるのです。野菜の中に含まれるカリウムが、体内でエネルギーがつくられるときに必要な物質だということです。(三木注：水溶性の珪素もミトコンドリアの好物です。珪素は、毛細血管を再生し、血管年齢を維持することにも大きく寄与します。)

ミトコンドリアが多い心筋細胞や脳を含む神経細胞は、酸素が不足すると破綻する：「脳梗塞」の7割くらいは、血圧降下剤による血流障害が原因です。脳の細胞は酸素不足に弱いからです。高齢者の脳梗塞は血圧の下げ過ぎが原因なのです。「認知症」もミトコンドリアの多い脳神経細胞の障害で、こちらも酸素不足による障害なのです。

体温を最も高くする行為はいうまでもなく運動です/ 入浴は二番手です：最も重要なのは、消耗するほど危険な忙しさ(と怠け)からの脱却です。2番目は、運動不足からの脱却で、3番目に食事の改善です。夜更かしはいちばんの問題で、あっという間に体温が下がります。逆にいえば、どんなに無理をしても、睡眠をきちんととってれば、だいたい耐えられます。

3. 今回の「支部長からのメッセージ」－これからの社会・経済・働き方・暮らし方の方向性－

今回は、最近の文献や記事から、これからの社会・経済・働き方・暮らし方の方向性について、ヒントになる最新情報をお届けいたします。

3-1 世界の立て直しにおける日本の役割^①より

いま世界は明らかに激変期を迎えています。それは今日まで続いてきた社会システムを根本か

ら変えてしまうほどのインパクトのある変革です。

一昨年9月のローマ法王フランシスコの国連演説、昨年4月に大々的に流出した「パナマ文書」、6月のイギリスEU離脱、7月に浮上した天皇陛下の生前退位問題、11月のアメリカ大統領選と今年1月以降のトランプ革命。こうした一見無関係に見える動きは、裏ではすべてつながっているようです。それは一言でいえば、金融経済を含めたこれまでの古いシステムを壊し、新しいプラットフォームを創ろうとする動きと言えるでしょう。

その際、一神教的価値観ではもう世界を治められないので、これからは日本から、世界の立て直しの波を生み出していくことが計画されているようです。

1990年代に「ヤコブ・モルガン」というペンネームで『最後の強敵 日本を撃て』、『続・最後の強敵 日本を撃て』等の一連の著作が刊行され、その中に以下のような記述があります。

『・・・が今一番恐れていることは、古来日本人が持つ天与の資質、悠久の深い歴史と文化、浄化された精神性、そして何よりも勤勉に基づく圧倒的な経済力と科学技術力である。

日本は、一万数千年の歴史を持つ世界でも最も古い国である。しかも日本人は山紫水明と四季の織りなす豊かな樹木と清冽な水で育まれてきた世界でもたぐいまれなる優しい心をもった民族である。その心の本質は「善」であり、他人を思いやり、世界の平和を願ってやまない純粋さを持っている。歴史はいま、この天性の美德を備えた日本と日本人に重大な役割を果たすべく動いているのであり、その時こそ世界が真に豊かになり、平和になるときである。

しかし、現在、世界にはこの「流れ」をくい止め、自分達こそが世界に君臨、支配すべきと考える勢力がある。その謀略性はすさまじく、無防備な現在の日本人にはそれが見えず、どのように仕組まれ、挑発されてもなすすべもなく「彼ら」の仕掛けたわなにはまっている。

日本の大衆はすでに長期間をかけて愚民化され、若者を中心にその精神の荒廃は無残であり、目を被うばかりである。日本人は真に目醒めなければならない。2000年（あるいは一万年）かけて醸成された日本人の日本的属性はわずか100年あまりの短時間で変わるとは思えない。表面的にはどう変わろうとも、身につけるものや所有するものがどれほど影響力を持とうとも、日本人の根の部分、本質は決して変わりはないであろう。それは日本人のなかにインプリントされているDNAのようなものであって、日本的属性を変えることはできないのである。

これから日本の国家と社会は大激動に見舞われるだろう。陰の勢力がいよいよ日本を標的とした数々のプログラムを実行するからである。日本人にその真相が見えないなら、残念ながら民族として滅びるしかあるまい。

戦後日本人は物質的に豊かになるためにひたすら組織に従属し、卑屈になり、犠牲的な生活を送ってきたが、今や日本人は精神性こそ大事であるという本来の価値観に目醒める時を迎えているのではないだろうか。

日本人は明治維新以来の白人崇拝をいいかげんにやめるべきであろう。日本が人類の歴史の中で与えられている役割はもっと崇高なものであるからだ。

日本人がこの天与の美しい日本列島の中で互いに幸せになり、子孫によりよい国家社会を残していきたいのであれば、ひとりでも多く本当のことがわかる人が増えてこなければならない。政治家や財界人にその能力がなく、利権集団でしかないのであれば、大衆の中からそのような人が出てこなければならない。羊のようにおとなしい日本人であってはならないのだ。そのためには

しっかりと歴史を学ぶことである。表向きの歴史ではなく真の歴史を知ることである。

日本政府や政治家、財界や大企業が真に日本を愛するものでないことは一目瞭然であろう。民族運動とは常に民衆に根づくものでなければならない。東洋人種である日本に覇権を渡すことを陰の勢力は許さない。そのため「彼ら」はあらゆる手を使って日本の弱体化戦略を発動するのである。』

こうした呼びかけに対して、どう受け止め、どのように行動に移していくかは、私たち日本人にかかっていると云えます。

3-2 原価 15 円で作られる 1 万円札を「1 万円とみなす価値」の仕組み⁷⁾より

— 「信用創造」の仕組みと世界大不況の始まり^{一部⁸⁾より} —

たぶん日銀は 1990 年代の終わりぐらいからマネーをつくれなくなりました。「信用」がなくなったからです。世界的にいうと、F R B (米国中央銀行) とか E C B (ヨーロッパ中央銀行) も、たぶん 2008 年のリーマンショック以降はマネーをつくれなくなりました。そうなってしまった理由は、日本の場合は 1997 年ぐらいに実質的に金融破綻して、世界は 2008 年にリーマンショックで金融破綻したことにあります。

今までの「信用創造」ができなくなったので、しょうがないから量的緩和をしてお金をジャブジャブにして、仕組みだけを維持しているのです。その後、そこらにある市中銀行がお金をつくるようになりました。量的緩和でベースになるお金はジャブジャブにあるので、市中銀行がほぼ勝手にお金をつくれるようになってきているというのが現状です。

お金というのはおもしろくて、今、お金をつくっているのは、それを銀行の外に出している市中銀行になります。**お金が生み出されるのは、銀行からお金を借りるときです。**銀行がお金をつくれるのは、お金を貸したときだということです。今、**私たちが使っているお金というのは、100%、誰かの借金をもとにつくられています。**

では、それがなぜ私たちのところにおいてこないのか。銀行という仕組みは信用がもとになっているので、信用が壊れたらダメなのです。つまり、貸したお金は何があっても回収してくださいということです。要は、回収できるお金でないと貸せない。

国が GDP の 2 倍以上の借金をして、その国債を全部日銀が買い取って、そのお金が全部市中銀行にたまっている。しょうがないから日銀の当座預金に置いてあっても、それが全然使えてないわけです。日銀の当座預金があんまり増えすぎたので「マイナス金利」にすると黒田日銀総裁が言ったわけです。**借りたい人はたくさんいますが、借りたいお金をちゃんと返せる信用に値する借り手がないわけです。**

(日本とヨーロッパはマイナス金利時代に突入してしまった。人類の経済史上、未曾有のことである。経済全体が停滞し、需要が伸びていく見通しがないから、誰もお金を借りてモノを買ったり、投資したりしないのである。マイナス金利というのは、経済が徹底的に冷え込んでいるということを意味する。金利はその国の経済の体温にもたとえられる。マイナス金利というのは超低体温症に経済が陥ってしまっているということだ。身体中の新陳代謝が不活発になり、免疫力も著しく低下している。極めて危険な状態だ。

一方、世界経済には正常化の動きも見られる。それはタックスヘイブン規制や、金融規制の再

強化の動きである。市場原理のみに依存せず、国家が適当な介入をすることにより、規律ある透明性の高い市場を創り上げていこうとする新しいまっとうな動きである。

過去 30 年を振り返ると「市場 VS 国家」の戦いにおいては、常に市場が国家を圧倒してきた。しかし、2010 年以降は、このトレンドが逆転してきている。国家の側がグローバリズムを規制する力を発揮し始めたのである。

グローバリズムとは、ヒト、モノ、カネの移動が国境を越えて自由化し、流動化するというトレンドであった。しかし、グローバル化がもたらしたものは、秩序ある世界経済の統合ではなく、実は世界の無秩序化であった。人々がこれに気がつきはじめたのが 2010 年以降の新しい潮流なのである。国家の秩序形成力が、再び求められる時代になったのである。

世界を大恐慌から救い出すには、先進国と新興国とを問わず、潜在的なインフラ需要を喚起して、これを現実のものとする以外にはない。そして、これを長期的な世界経済成長のエンジンにしなければならない。安倍政権は、2015 年 5 月に、A I I B（アジアインフラ投資銀行）に対抗して、日本独自の構想をスタートさせた。日本が主導する A D B（アジア開発銀行）や O D A を通じた融資を含め、今後 5 年間で約 13 兆円の「質の高いインフラ投資をアジア地域に提供する」というものである。

世界の平和は、異なる宗教、民族、人種が賢く棲み分けることにより初めて達成される。異なる文化集団・文明集団が、お互いの存在と個性を尊重しつつ、棲み分けることが肝腎である。市場化によりすべてを均質化しようとするれば、反発と混乱と暴力を生むだけなのだ。

我々は、ヨーロッパの失敗を繰り返してはならない。安易な移民政策をとれば、どのような結果が起きるかはヨーロッパの実験で明らかである。今後、日本が直面しなければならない難民問題は、チャイナからの経済難民の大量流入である。チャイナ経済は、長期的に既に混乱と衰退の時期に入っている。）

では、この信用創造の仕組みが今後も続くのか？

何で国債を発行するかというと、日本は借金をする人がいなくなってしまったからです。個人も企業も借金をしない。誰が借金できるかというと、政府しかない。お金をつくろうと思ったら、政府が借金してあげるしかないのです。日本は 20 年近く、政府しか借金できなくなっている状態なので、こんなに国債の発行残高がふえてしまったわけですね。

日本国債の信用は、今のところ大丈夫です。今、世界で一番信用されている通貨は円です。実はイギリスの EU 離脱で一番えらい目に遭うのはドイツだろうと言われています。その中でもドイツ銀行は、これで決定的にダメージを受けるのが確実です。金融派生商品と言われているデリバティブのドイツ銀行の残高はドイツの GDP の 20 倍あって、世界の GDP 総額を超えているそうです。イギリスの EU 離脱によって、ドイツが 1923 年に経験したようなハイパーインフレを世界中一緒に経験する可能性が出てきました。止められる可能性は 3 % くらいですね。80 歳以上の人でないと経験したことがないようなしんどい世界が 97% の確率で来てしまう。

（世界恐慌 2.0 が今、まさに起きようとしている。いや、既にもう始まっている、と言った方が正確かもしれない。チャイナのバブル経済の崩壊が引き金となって、これがヨーロッパを直撃した。2016 年の年初以来、ヨーロッパの銀行株は暴落している。今まで我々が経験したことのない世界大不況が始まろうとしている。）

今、とり得る方法は、「問題先送り」を選ぶか、「破壊」を選ぶかなんですね。一番大事なのは、その終わらせ方で、上昇で終わらせるために、**まずやれることは、本当に感謝してお金を使うということですね。**すると、買い物するモノが選ばれるわけです。本当に安心・安全なものを買えるような世の中にするのは、私たちの選択です。お金というエネルギーをいかに使うか。日々の暮らしの中で、何を選んで、どう食べるのか、誰とつながるのか、どこに行くのか。本当に命が喜ぶような使い方で、時間とかサービスとかモノをお金というエネルギーで交換していく。

これからは、「信用創造」は、国がするものでも、中央銀行がするものでも、市中銀行がするものでもなくなってきて、**個人がするものになっていって、どんな信用創造をするかは、あなたが決めるものになっているのです。**自らの価値を高めていくことによって、まず自分自身が信用される存在になる。そして、そうした自分が、モノも含めた他の世界とかかわることによって信用創造ができていき、かかわりの中で喜びや感謝がふえていって、それがマネーという形でも見えていく。そういう方向になっていくと思います。

お金が循環する社会というのは、愛が循環する社会。このように、「信用」という五次元からの贈り物であるお金の本質を再認識した上で、私たちの暮らしや社会、そして人類の意識そのものもシフトしていく時代が萌芽したと言えると思います。

注) ()内の記述は、文献8)からの引用です。

3-3 稼ぐ仕事の縮小、ひいては貨幣経済の縮小が幸せな未来シナリオではないでしょうか

(<http://www.recruit-ms.co.jp/research/2030/opinion/detail34.html> 太田直樹氏 総務大臣補佐官へのインタビューより)

「稼ぐ仕事、給与をもらう仕事が縮小すると同時に、仕事や生活に対する価値観が変わるとよい」という答えについて、詳しく聞かせてください。

AI やロボットが急速に普及するのは、ほぼ確実です。はっきり言えるのは、こうした技術進化が、飛躍的に生産性を上げるということです。そして私は、技術進化で生産性が上がるとともに、特に地域では、消費や貨幣経済の規模が小さくなっていくシナリオに向かうのがよいと考えています。つまり、AI やロボットが発達することで、多くの人が、稼ぐ仕事、給与をもらう仕事に携わる時間が短くなり、給与も減るのですが、その分、余った時間で、自治体やコミュニティに貢献して地域通貨を得る、あるいは自給自足や物々交換をするのです。そうなれば、貨幣経済の占める部分は自然と小さくなっていきます。

実は、すでにこうした未来に向かう兆しが現れている地域があります。例えば、島根県の海士町では、稼ぎ（貨幣経済）、なりわい（地域の仕事）、自給自足を3等分にする社会実験を構想していると聞いています。また、地域にシェアオフィスを作って、何割かの時間を村のために働いてもらう「定住しない地域おこし協力隊」を集める構想を話し合っているところもあります。

私がなぜこのシナリオに魅力を感じるかといえば、幸福学の研究成果として、消費行動よりも「人間関係」や「つながり」が、幸せや豊かさに大きく影響することが明らかになっているからです。稼ぎを減らして、地域とのつながりや家族関係をより大事にする生活の方が、私たちは幸せに暮らせると思うのです。

都市では、そうした生活は難しいのではないかと思います。

そうですね。しかし、実際はいくつか変化の兆しが見えています。1 つは、リモートワークやテレワークです。あるとき一斉に、皆がシェアオフィスで働きだしても、それほど驚くことではありません。また、シェアリング・エコノミーの拡大も兆しの1 つです。東京では、自動車の稼働率は平均3%しかありません。残りの97%の大部分は、所有するよりもずっと安いコストで「利用」したほうがよいと考える時代が、早晚やってくるはずですが、もっと言えば、技術の発展とビジネスモデルの革新は、地域はもちろんのこと、いずれは都市をも「限界費用ゼロ社会（モノやサービスが無料の社会）」に変えていくことでしょう。

自給自足ということでは、日本版「ダーチャ」を推進するのは面白いと思います。ダーチャとは、ロシアで普及している農地つきセカンドハウスのことです。ロシアでは、都会暮らしの中間層のかなりの割合がダーチャを所有し、週末は郊外の家庭菜園で過ごしています。耕作放棄地や空き家の活用に本腰を入れれば、日本でも十分に実現性があるのではないのでしょうか。

私としては、第4次産業革命で経済を発展させ、GDPをさらに拡大していくことを特に否定するつもりはないのですが、個人的にはそれにあまりワクワクしません。これ以上、貨幣経済を大きくしても、私たちが幸せになれるわけではないのですから。

イギリスで「EU 離脱」の判断がなされたことは象徴的で、世界の変曲点になるのではないかと思います。しかし、太田さんのような考え方は、まだ多数に理解されているわけではないと思います。そのことをどう考えていますか。

その意味では、先日のイギリスの「EU 離脱」が象徴的だと考えています。あの出来事を「衆愚」と捉える向きが多いですが、私は必ずしもそう思いません。大事なのは、多くのイギリス国民が、「グローバル化、貿易の自由化が進むのがよいと思わない」と判断したことだろうと思います。1970年代以降、グローバル化が進み、貿易量が増えてきました。それで進んだのは、国家間の格差縮小と、国内の貧富差の拡大です。つまり、グローバル化が進むほど、国内の貧富の差が広がるのです。こうした貿易量と貧富の差の関係はもう明らかになっています。

私の印象では、功利主義が生まれた国に住むイギリス人がEU 離脱を選んだ背景には、「これ以上貿易を増やしても、イギリス人は得をしない、幸せにならない」という冷静な計算があるのではないかと思います。そのように考える人がまだ多数になったわけではないとはいえ、イギリスでこうした判断がなされたことは象徴的で、世界の変曲点になるのではないかと感じています。私たちがこの辺で一度立ち止まって、グローバル化と現在の資本主義の延長上に良い社会があるのかどうかを考えるとよいのではないかと思います。

では、今後の日本はどうなっていくと考えていますか。

それは、日本人の「価値観」がどう変化していくかによるだろうと思います。今の資本主義を支えるのは「お金を稼ぐことは良いことだ」という考え方ですが、江戸時代までの日本では、お金を稼ぐのは必ずしも良いことではなく、「清貧」が尊ばれていた側面もあるわけです。その後、明治になって、福沢諭吉などが「稼ぐことはよいことだ」という価値観への変化を先導した歴史があります。

稼ぐことが良いことだという価値観が変われば、ガラリと世の中が変わる可能性が十分にあります。価値観と社会の変化は、それほど密接につながっています。その意味で、教育機関が重要になってくると思います。

「ピンピンコロリ」「在宅医療」などを追求することは、社会保障費や家族の問題を解決する上で大きな意味があるはずですが、では、最後の答え「コミュニティが食べることで死ぬことを取り戻すことが、静かに変化の波を広げていくとよい」について、お聞かせください。

これまでに話ししてきた「権力の分散」「市民参加型の行政」「稼ぐ仕事の縮小」といったシナリオには、すでにそれぞれ兆しが起きています。しかし、どれもまだ小さな兆しでしかなく、どのようにして大きな流れにしていけばよいかという課題があります。

もちろん、強力な指導者や思想家が変革をリードする可能性は十分にありますが、一方で、人々の間に少しずつ広がっていく共感が、兆しを大きくする原動力になるのではないかというのが、まだかなりぼんやりとした私の仮説です。具体的には、コミュニティが「食べること」と「死ぬこと」を取り戻すことが重要ではないかと考えています。そこには経済的な合理性もあります。

「コミュニティが食べることを取り戻す」とは、その地域の人々が、できるだけ自分の地域で作られた農作物や肉、魚などを食べるということです。少々高くついても、他においしそうなものがあったとしても、皆が自分の地域でできた食べ物を優先するということです。そうなるためには、土地利用を含めたまちの計画から始まって、商店街・飲食店のあり方、物流、そして文化や風習の継承など、コミュニティの住民がまちづくりに主体的に関わることが求められます。それが実現できれば、経済的には、貨幣経済の外部に豊かな自給自足・物々交換の関係性を広げることができるでしょう。また、それが地域の魅力となり、結果的に地域外から稼ぐ力も増し、交流が拡大していくことも十分に考えられます。こうした循環を作っていけたら、多くの人が幸せに生活する地域が実現できると思うのです。

「コミュニティが死ぬことを取り戻す」というのは、亡くなる直前の日々を、病院ではなく自宅で過ごす習慣を作るということです。そのためには、家族やコミュニティが豊かな関係性を築くことが重要です。日本の在宅死亡率は、戦後の8割から低下し続けており、高度成長期に在宅死亡者と病院死亡者と逆転して、直近はわずか14%です。しかし近年は、在宅死亡率が上昇している地域が出てきており、地域差が大きくなってきています。ちなみに、先ほど少し触れた島根県海士町の在宅死亡率は40%超で、県内トップです。これからは、こういったことが関心を集めると思います。経済的には、もちろん右肩上がりの社会保障費の問題があります。「ピンピンコロリ」「在宅医療」などを追求することは、社会保障費や家族の問題を解決する上で大きな意味があるはずなのです。

このようにして、コミュニティが「食べること」と「死ぬこと」を取り戻すことが、小さな兆しを大きく広げて、地域経済の形を変え、ひいては日本や世界をより良くすることにつながると考えています。

おわりに

はじめに結論を述べましたように、世の中はこれから大きく転換し、世界中で「すみわけ」を目指して、「持続可能な地域循環社会」の「立て直し」が始まります。本稿の要点を振り返ると、次のとおりです。

1) いま世界は明らかに激変期を迎えており、金融経済を含めたこれまでの古いシステムを壊し、新しいプラットフォームを創ろうとする動きが始まっている。そして、歴史はいま、天性の

美德を備えた日本と日本人に重大な役割を果たすべく動いている。

2) 世界恐慌が今、まさに起きようとしている。世界を大恐慌から救い出すには、先進国と新興国とを問わず、潜在的なインフラ需要を喚起して、これを現実のものとする以外にはない。そして、世界の平和は、異なる宗教、民族、人種が賢く棲み分けることにより初めて達成される。また、2010年以降は、国家の側がグローバリズムを規制する力を発揮し始めた。

3) 本当に命が喜ぶような使い方で、時間とかサービスとかモノをお金というエネルギーで交換していくことにより、お金の循環を通して愛が循環する社会が実現する。そして、これからは、「信用創造」は個人がするものになっていって、どんな信用創造をするかは、あなたが決めるものになっている。

4) 技術進化により生産性が上がることで、多くの人が、稼ぐ仕事、給与をもらう仕事に携わる時間が短くなり、給与も減るが、その分、余った時間で、自治体やコミュニティに貢献して地域通貨を得る、あるいは自給自足や物々交換をすると、貨幣経済の占める部分は自然と小さくなっていく。稼ぐ仕事の縮小、ひいては貨幣経済の縮小が幸せな未来シナリオではないでしょうか。また、グローバル化は必ずしも幸福につながらない。シェアリング・エコノミーや日本版「ダーチャ」を推進し、家族やコミュニティが貨幣経済の外部に豊かな自給自足・物々交換の関係性を築き、コミュニティが「食べること」と「死ぬこと」を取り戻すことが重要である。

以上が、これからの社会、経済、働き方の方向性についてのヒントです。本稿の1. と2. で紹介した、これまでの「支部長からのメッセージ」と合わせて見ていただくと、これからの動乱の時代の先に、立て直すべき未来の姿が見えてくるのではないのでしょうか。

参考文献

- 1) 前川正雄：『再起日本！—世界のハイテク技術を拓く』、ダイヤモンド社、2013年3月22日
- 2) 富山和子：『日本の米—環境と文化はかく作られた』、中央公論新社、中公新書1156、1993年10月25日（初版）
- 3) 沼田光生：『あなたの知らない生体ミネラルの真実—一次世代療法とミネラルバランスの重要性』、株式会社ビオ・マガジン、2013年2月11日
- 4) 安保徹：『病気にならない常識』、株式会社創英社/三省堂書店、2014年6月30日
- 5) 安保徹：『病気知らずで大往生—安保流ピンピンコロリ術—「ミトコンドリア」と「自律神経」が“死ぬまで元気！”のカギ』、株式会社五月書房、2008年9月28日
- 6) 中矢伸一：『ロックフェラー、ロスチャイルドを超える「奥の院」がこれからは日本の時代だと決めた』、ヒカルランド、2016年10月31日
- 7) 船井勝仁・はせくらみゆき：『お金は五次元の生き物です！』、ヒカルランド、2016年10月31日
- 8) 藤井巖喜：『世界恐慌2.0が中国とユーロから始まった』、徳間書店、2016年3月31日